

# 堀辰雄研究

梶川美佐子

## 目次

はじめに

第一章 堀辰雄と死との出会い

第一節 母の死

第二節 師芥川龍之介の死

第三節 婚約者矢野綾子の死

第二章 堀辰雄と病氣

第三章 堀辰雄における生と死とエネルギー

おわりに

## はじめに

昨年の三月、信州の研修旅行に参加し、軽井沢を散策した折、高校生の頃、私が強く心を魅かれた、あの堀辰雄の清新で、美しく、どこか洒落た、香り高い作品の雰囲気、あたり一面に漂っており、まるで『美しい村』の中に迷い込んだような錯覚に陥ったりしながら、作品を読んだだけでは味わえない、実際の雰囲気を感じし

た。そんなことがきっかけとなって、卒業論文に堀辰雄を選んだのである。

しかし、もう一度作品を読みかえすにあたって、清新で、美しく、どこか洒落た雰囲気の下に、何か強靱なエネルギーともいえるべき強固なものが、しだいに姿を表わしてきたのである。それとともに、彼の病気が作品の片隅からしばしば顔を出し、それが一つの魅力ともなっており、生と死が作品の中で両極端に位置しながらも、絶えず両者が近づいたり、遠のいたりして、それが一種のハーモニーをかもしだしているように思えてきたのである。

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。

(聖家族)

皆がもう行き止まりだと思つてゐるところから始つてゐるやうなこの生の愉しさ。

(風立ちぬ)

この二つの言葉の象徴していることが、堀辰雄の作品における要素をなしているように思われるが、又それには親しい者たちの死との出会いが関係しているのである。そこで、堀辰雄と死との出会いや彼の病氣を通して、彼の底に潜んでいるものや強靱なエネルギーを探っていきたいと思う。

なお、本文における堀辰雄の作品の引用は筑摩書房『堀辰雄全集』に拠る。

## 第一章 堀辰雄と死との出会い

### 第一節 母の死

明治三十七年十二月二十八日、堀辰雄は東京の麹町区平河町に生まれた。父は堀濱之助（広島藩の士族、維新後上京して裁判所の書記をしていた）、母は西村志気。濱之助には妻があつたが子供がなく、辰雄は堀家の嫡男として届け出され、実母も平河町の家で一緒に暮らした。後に堀辰雄は『花を持てる女』のなかで次のように述べている。

さういふ年も身分もちがふその濱之助といふ人に、江戸の落ちぶれた町家の娘であつた私の母がどうして知られるやうになり、そしてそこにどういふ縁えんじが結ばれて私といふものが生れるやうになつたか、さういふ点はまだ私はなんにも知らないものである。

しかし辰雄が二歳のとき、母志気は彼を連れて堀家を出て、妹夫婦の家にいったん身をよせ、それから祖母を呼び、向島土手下の家で煙草などを商つて暮した。そして二年後、辰雄が四歳のとき、母は彫金師、上条松吉と結婚し、向島須崎の上条の家に辰雄とともに移つたのである。そのことを後年堀辰雄は、

私の意識上の人生は、突然私の父があらはれて、そんな佗住

ひをしてゐた母や私を迎へることになつた、曳舟通りに近い、或る狭い路地の奥の、新しい家のなかでやうやう始つてゐる。

（『幼年時代』）

と書いている。その後、彼が六歳のとき、実父濱之助が死亡したが、辰雄には伝えられない。福永武彦氏によると、堀辰雄は養父上条松吉を実父と信じて疑わなかつたやうである。彼は養父の死後、初めて、実父の存在を知らされたのであつた。

一方、堀辰雄は母志気のことを、

勝気でしつかりとした人、私のことだとすぐもう夢中になつてしまふ人、——誰でもが私の母のことをさう云ふ。

（『幼年時代』）

といい、彼の母が彼を大切にすることは大変なもので、辰雄のことを「うちの殿様」と呼び、何事もうちの殿様本位であつた。そして堀辰雄が中学校の入学試験を受けるときには、浅草の観音様に願掛けをして、平生嗜んでいた酒と煙草を断ち、彼が一高に入つて詩などを書き始めると、「まだおまえには原稿料を貰えないのだから」といって、彼の書いた詩を一篇一円で買つてくれたといふのである。

このようにして、堀辰雄は養父の弟子たちを含むたくさんの家族の中で、中村真一郎（庄）氏のいうやうに、「普通の下町の両親の子としてではなく、山の手のお邸からあずかつた坊ちゃまとして」自分だけが特別扱いをされて育てられたやうである。母志気の堀辰雄に対するそのような深い思いは、いいかえれば、堀辰雄の実父堀濱之助に対する深い愛情であつたのではないだろうか。そして、その人の

子として、恥ずかしくない、りっぱな子として育てようという思いが、彼を特別扱いするようになったのであろう。が、一方堀辰雄は自分だけが特別に扱われることから、だんだん孤独に陥っていく。『幼年時代』の要所々々に何か意味を含んでいるように出てくる無花果の木について、堀辰雄はこう述べている。

「私にとつて、おゝ無花果の木よ、お前は長いこと意味深かつた。お前は殆ど全くお前の花を隠してゐた……」とリルケの詩にも歌はれてゐる、この無花果の木こそ、現在では私もまた喜んで自分の幼年時代をそれへ寄せたいと思つてゐる木だ。恰も丁度私の幼年時代もまたその木と同じく、殆ど花らしいものを人目につかせずに、しかもかうやつていつか私に愉しい生の果実を育くんでゐてくれてゐるとでも云ふやうに……」

#### 〔幼年時代〕

無花果は、花囊の内面に花をつけ、花を人目にさらさぬ植物である。堀辰雄もまた、この無花果の木のように、自己の内面で孤独に堪え、それを育て、自分独自の世界を形成していきながらも、決してその心を、自己の内面を、他人（自分以外の者）に窺わせようとしなかつた。すなわち、堀辰雄は現実と自己の内面の世界と、いわば二つの世界を生きたのである。それは堀辰雄の文学が、常に現実と実生活に対して一定の距離を保ち、その調和を保っていることにかがえるのではないだろうか。また一方で堀辰雄は非常に自分大切にした人である。そして仕事の上でも生活の上でも、自分を自分の好みにあつたものにしようと、絶えず努力を重ねていった人である。だが、その底辺では、彼の母が彼の幼年時代から青年時代を

通して、終始、彼堀辰雄を無上無私の愛でもつて、大切に大切にはぐくんできたことが、大きな要因となっているのではないだろうか。

大正十二年九月一日、関東大震災が突如として堀辰雄から母を奪い去つた。——彼が人生の中で最も愛した人を、彼を無条件といえるほどに愛しつづけた母を、

この関東大震災の有様はどのようなものであつただろう。

相模湾海溝最深部の北面端を震源地としたといわれる真昼の大震災が、一瞬にして東京を潰滅状態に陥れてしまつたのは大正十二年九月一日の真昼のことである。本所一帯でも一尺から二尺という揺り下りがあつたといわれ、地震発生と同時に家屋の倒壊が相次ぎ、たまたま路上を歩いていたものはよろけ、水道、電気、ガス、交通はまたたくまに途絶えてしまつたといふ。

しかし家屋の倒壊よりも恐ろしいのが火災だつた。折悪しく昼食の時間でどの家でも火を使つていたため、家屋が倒壊するやいなや忽ち火事が起り、本所でも十七か所からいっせいに火が出て、消しとめられたのは四か所のみ、あとの火はなすすべもないままに忽ち燃え広がつたという。そして午後八時頃までには本所地域をほぼ焼きつくしてしまつたというから恐ろしい早さである。（中略）ともかく一分間に四千百三坪を焼いたという事実から、どんなに凄じいものだったか想像がつく。

#### 〔東京震災録〕<sup>(注)</sup>

父母とともに逃げた堀辰雄は、両親とはぐれて、この炎熱地獄の

中で隅田川を泳ぎ切つて生きぬいた。その気力は相当なものである。しかし、彼の母はとうとう逃げのびることができなかった。彼は生きのびた父松吉とともに三日三晩隅田川の土堤に並ぶ死体を見て歩き、とうとう母の遺体にめぐりあい、大八車で運んだというのである。その間、彼は人々の死体に触れ、多くの死を目の当りにしたのである。いわば、現実世界の崩壊と死との遭遇、それは青年堀辰雄にとって、深甚な衝撃であつたに違ひなく、それまでの彼の世界は全くくつがえされてしまつたのである。

地震が起つた。

そしてそれが路易のまだ子供らしくしてゐた夢の積木細工をひつくりかへした。

#### （顔）

関東大震災ノそれは堀辰雄において過酷な人生（生と死）との最初の、そして鮮明な出会いではなかつたか。

なかでも母の死はあまりに衝撃的でありすぎた。震災後、自らが母の位牌に書き込んだ、

震なわが母をみわけぬらみかな

という一句は、母の死が彼に与えた衝撃の激しさや、言い表わし難い彼の無念の思おもひを、じかにぶつめたような、そんな思おもひがこめられた句ではないだろうか。

その後堀辰雄は母の死について沈黙している。が、九年後の昭和七年、『麦藁帽子』と『顔』という短編の中でさりげなく表われる。

早朝、私の父の到着の知らせが私たちを目覚ませた。私の母は私の父からはぐれてゐた。さうしていまだにその行方が分らなかつた。私の家の近くの土手へ避難した者は、一人残らず川

へ飛び込んだから、ことによるとその川に溺れてゐるかもしれない。……

さういふ父の悲しい物語を聞いてゐるうち、私は漸くはつきり目をさましながら、いつのまにか、こつそり涙を流してゐる自分に気がついた。しかしそれは私の母の死を悲しんでゐるのではなかつた。その悲しみだつたなら、それは私がそのためためにすぐかうして泣けるには、あまりに大き過ぎる！

#### （『麦藁帽子』）

これを書くにあつて、堀辰雄は當時を鮮明に思い出し、それに堪えつつ、苦渋の思おもひを味わつたであらう。『麦藁帽子』は彼の初恋と、彼と母とのつながり（死も含めた）が縦糸と横糸のように織りなされているが、実は母への鎮魂の思おもひを託した鎮魂歌ではなかつたろうか。母の悲劇については間接的に、さりげなく書かれてゐるが、何か心にズシンと響いてくるものがある。堀辰雄の場合、言わんとすることは、多く語られてゐない。さりげなく本質をついた一言が、重要な意味を持つてゐるような気がするのである。

彼はリルケの『ドワイノの悲歌』について述べてゐる『心の仕事』の中で、悲しみについてこう語つてゐる。

第十の悲歌のあの冒頭の部分は、此の最後の悲歌の主題として考へられる、悲しみを過ぎつて本當の生に到達する「道」の探究へと我々を導いてゆくために、先づ、我々、地上の愛に充ちた者らにおける悲しみの位置といつたものをはつきりとさせてゐるのであります。

本當の人生への道は悲しみを過ぎよりながら通つてゐる。その

悲しみを浪費したり、その果てるのを欲したりしてはならない。そしてそれを大事にしなければならぬ。何故なら、すべてのものが死んで、我々が無限の生の新しい季節にはひつてゆくとき、我々に残されるのはその悲しみだけだからである。

十九歳という人間形成にとって一番大切な時期に受けた悲しみが、母の死という人生における最大の悲しみであった。堀辰雄は、それから逃げずに、正面から見つめ、その苦痛に堪えつつ、重く深いその悲しみを自己の意識の内面に、徐々に形成していった。それは彼が後にリルケに接近し、大きな影響を受け、それを自分なりのものにするのができた大きな要因となつたのではないだろうか。そしてそれは又、堀辰雄の文学の上にも、その根底に何物かを残している。「生の意識」の芽ばえであらうか。

震災後の冬のはじめ、堀辰雄は母を失つた精神的打撃と罹災に伴う肉体的過勞から、彼の生涯の宿痾となつた結核の前兆とも言うべき肋膜炎に罹り、休学するのである。

このように、堀辰雄における母の死は、肉体において、精神において、文学において、激しい衝撃を与え、彼は少年期に訣別していった。そして何かが彼の内に形成されていくとともに、堀辰雄は内面に強固なものを貯えていき、「生の意識」が芽ばえてくる。それは後に堀辰雄の人生と文学における礎となつたのである。

注1 福永武彦『内的独白』

河出書房新社

2 『堀辰雄全集 第二巻 月報2』

3 田中清光『堀辰雄——魂の旅——』所収の「関東大震災」に  
拠る。

## 第二節 師芥川龍之介の死

大正十二年は母の死とともに、堀辰雄の人生の上で最も意味深い年である。一月、萩原朔太郎の詩集『青猫』を耽読する。五月、三  
中校長広瀬雄に室生犀星を紹介され、八月、軽井沢に滞在中の犀星  
を尋ねて、後に彼の文学の舞台となつた信州の軽井沢に、初めて訪  
れる。そして十月、犀星から芥川龍之介を紹介される。これら三人  
の文学者との邂逅は、堀辰雄の文学的生涯において重要な位置を占  
めるのである。が、なかでも芥川龍之介こそは堀辰雄にとって、生  
涯の師であり、「彼の魂に最も近い他の魂」であつたのである。一  
方、芥川自身も同じ東京の下町に生まれ育つた堀辰雄のなかに、中  
村真一郎氏(金)によると「自分と同質の趣味と氣質とを備えた芸術家を  
発見」し、唯一人の若い弟子と認めていたのである。

しかし昭和二年七月二十四日、芥川龍之介は自殺した。この師の  
突然の死は、堀辰雄に激しいショックを与え、芥川の死後、『芥川  
龍之介全集』の編集の仕事に専心した堀辰雄は、翌年昭和三年肺炎  
を悪化させて一時死に瀕したのである。

だが、彼は「師芥川龍之介の死」に絶望しなかつた、そのショッ  
クに埋没しなかつた、そして何よりも重要なことは、彼が自分自身  
を見失わなかつたことではあるまいか。しかし、その衝撃は彼の精  
神の内部に深刻な影を落したにちがいない。

昭和四年堀辰雄は卒業論文に『芥川龍之介論』を書く。そしてそ  
れを書くにあたって、彼はまず自分自身を冷静に見つめることから

始めた。その冒頭で彼はこう述べている。

芥川龍之介を論ずるのは僕にとつて困難であります。それは彼が僕の中に深く根を下ろしてゐるからであります。彼を冷静に見るためには僕自身をも冷静に見なければなりません。自身を冷静に見ること——それは他のいかなるものを冷静に見ることよりも困難であります。

(中略)

しかし、それと同時に僕は、その故に、彼を論ずる事に情熱を持たずにはゐられません。

こうして堀辰雄は芥川龍之介を冷静に見るために、自分自身をも冷静に見つめるという困難なことに敢えて立向かつてゐる。そこに師芥川龍之介を論ずるにあつたので、堀辰雄の異常なまでの精神の高揚や意気込みがひしひしと感ぜられる。しかし、決して堀辰雄は自分の師である芥川龍之介を甘んじて見てはいない。あくまでも一箇の芸術家として、芥川龍之介を冷静に見ているのである。

そしてこの論文の目的を、

いかに彼の芸術が僕の中に根を下ろして行つたか、そしてまた、いかに彼の芸術が彼自身をしてあのやうな悲劇的な死に到らしめたか。

という点に置いた。堀辰雄は自分自身にとつてもまた、「自分と同質の趣味と氣質とを備えた芸術家」である芥川龍之介の悲劇を追求することによつて、「師芥川龍之介の死」に何らかの結論を与えようとし、同時にまた、その衝撃の中から脱する糸口を見出そうとして『芥川龍之介論』を書いたのではないだろうか。

堀辰雄は次に、

芥川龍之介は僕の眼を「死人の眼を閉ぢる」やうに静かに開けてくれました。僕はその眼でゲエテやレムブランドの豊かな美しさを、ボオドレルやストリンドベリーの苦痛に似た美しさを、そしてセザンヌや志賀直哉の極度の美しさを見てゐるのであります。そして又、僕はその眼で芥川龍之介自身の作品をも見てゐるのであります。僕のその眼は彼の作品の欠点をも見逃さないでせう。

と述べる。堀辰雄の人生と芸術への眼は、芥川龍之介によつて開かれたのである。そして「その眼」を今度は、師芥川龍之介の上に注ごうというのである。そこに堀辰雄の悲痛な思いと同時に、「師芥川龍之介の死」を、あくまでも一人の文学者堀辰雄としての「その眼」で見たいこゝろという必死な思い——それは堀辰雄が師芥川龍之介のような悲劇を二度と繰返さない文学者となるためには、必然的なものであつたであらう——がこめられてはいしなひだろうか。

堀辰雄は「その眼」でもつてまず、芥川龍之介が本によつて人生を学んだ点に注目し、

この「本から現実へ」は後年の彼をして「芸術に依つて芸術を作り出す」作家の一人たらしめた。彼は遂に彼個々の傑作を持たなかつたと断言してよい。彼のいかなる傑作の中にも、前世紀の傑作の影が落ちてゐるのである。

と強く言いきつて鋭く批評している。そして堀辰雄もまた、「芸術に依つて芸術を作り出す」作家の一人であつたのである。さらに堀辰雄は、芥川龍之介の第一の悲劇は「彼の中で鋭い理性と柔かい心

臟との調和」、すなわち外剛内柔の調和が破れ始めたことにあり、第二の悲劇は「彼の本に対する情熱」による「雑駁さ」の調和が破れ始めたことにある、と指摘する。

このように堀辰雄は「自分と同質の趣味と気質とを備えた芸術家」、芥川龍之介の悲劇を追求し、芥川が死でもって開けてくれた眼で、芥川を冷静に見つめることによって、自分が芥川龍之介と同一の素質を持っていることを、よりはっきりと自覚し、そこから自分が生きるべき何らかの方向を見出していったのではないだろうか。堀辰雄はこの芥川龍之介論を書くことによって一つの教訓を得た。

自分の先生の仕事を模倣しないで、その仕事の終つたところから出発するもののみが、真の弟子であるだらう。

芥川龍之介は僕の最もいい先生だつた。そしてここに、僕の前に、彼が最後に残して行つた言葉があるのである。

「何よりもボオドレエルの一行を！」

僕はこの言葉の終るところから僕の一切の仕事を始めなければならぬ。

僕はこの言葉にブレエキをかける。それからそれを再び出発させる。全く別の言葉のやうに。

『芸術のための芸術について』

彼はそれを文字通り実行する。『聖家族』の冒頭の一行、「死があたかも一つの季節を開いたかのやうだつた。」は、「師芥川龍之介の死」からの出発を明らかに示したものはあるまいか。その出発の方向は、

彼はその名刺を裏がへし、そこに、

河野扁理

といふ字を不恰好に書いた。

それを見ながら、さつきからこの青年と九鬼とは何処がこんなに似てゐるのだらうと考へてゐた細木夫人は、やつとその類似点を彼女独特の方法で発見した。——まるで九鬼を裏がへしにしたやうな青年だ。

という『聖家族』の一節に託されている。

「まるで九鬼を裏がへしにしたやうな青年」河野扁理は、堀辰雄のこれからの自分のあり方——すなわち、師芥川龍之介と全く反対に生きる決意——を示してはいはしないだろうか。

芥川龍之介が次々と別の主題、別の背景の短編を作り続ける「稲妻型」の生き方をした作家で、外剛内柔の気質を持っており、終には自殺という死を選んだのに対し、堀辰雄はほとんど一つの主題を、長い時間をかけて長編で追求しつづけ、内剛外柔の気質をもって、自分独自の世界を内面で作り上げ、それを守りつつ、生涯を通じて病氣と戦いながら、絶え間のない生への試みを行ない、魂の孤独と苦しみの中で、文字通り、生きて生きて生きぬいて、生きられる限りを生きぬいたのである。そうして堀辰雄は師と反対に生きることを、生涯、自分に課したのである。文学者であるために。死に向かわないために。そして彼は死に見入ることによって「生の意識」をはっきりと自覚したのである。

「師芥川龍之介の死」は堀辰雄にとって、いったい何であつたのか？ 文学者として出発点に立ったばかりの青年堀辰雄にとって

は、中村真一郎<sup>(注2)</sup>氏の言ういわゆる「最も手近な理想——堀辰雄のよ

うな性格と教養との持主が、作家となり得る殆んど唯一の可能性」であった芥川龍之介の死(自殺)は、いわば人生の門出でこれから自分が生きていこうとする文学への可能性が、不可能であることの証明であったのではあるまいか。その衝撃は「母の死」とはまた違った、だが恐るべき衝撃であったであろう。彼は『芥川龍之介論』を書くことによって、そのことを改めて認識するとともに、文学者として自分の生きべき何らかの方向を見出し、『聖家族』を書くことによって、初めて「師芥川龍之介の死」からのりこえ、堀辰雄自身の人生と文学のあり方——すなわち、師芥川龍之介と全く反対の方向に生きること——をはっきりと認識し、それを自己の課題としたのである。そしてそうすることによって文学への可能性を自らを作り出していったのである。そこに堀辰雄における「師芥川龍之介の死」の意味と価値があるのではないか。堀辰雄の本当の意味での文学者としての出発は、「師芥川龍之介の死」をのりこえる所から始まったのである。そしておそらく、堀辰雄はそういう意味を含めて、『聖家族』を「芥川龍之介先生の霊前にささげた」のである。

注1 日本文学研究資料刊行会編『堀辰雄』所収の「堀辰雄」(中

村真一郎)による。

2 「注1」に同じ。

### 第三節 婚約者矢野綾子の死

堀辰雄は『聖家族』を書き上げた後、咯血をし、翌年昭和六年、信州富士見高原療養所に入院、退院後もしばしば病臥するようになる。芥川龍之介の死後、昭和三年から昭和八年にかけて堀辰雄は、生涯の宿痾、肺結核に冒され、精神的にも肉体的にも様々な要素を含んだ、贅のある暗い生活を送っている。

が、昭和八年、軽井沢で『美しい村』の創作に没頭するようになると、彼の健康は病身なりにも回復してくる。そのように堀辰雄が精神的にも肉体的にも、死の暗い陰からのがれ、しだいに明るい「生」に近づこうとしている時、彼の前に、

突然、私の窓の面してある中庭の、とつくにもう花を失つてゐる躑躅の茂みの向うの、別館の窓ぎはに、一輪の向日葵<sup>ひまわり</sup>が咲きでもしたかのやうに、何んだか思ひがけないやうなものが、まぶしいほど、日にきらきらとかがやき出したやうに思へた。私はやつと其処に、黄いろい麦藁帽子をかぶつた、背の高い、痩せぎすな、一人の少女が立つてゐるのだといふことを認めることが出来た。……

(美しい村「夏」)

という一人の少女が出現する。それは健康をそこね、転地療養がてらに軽井沢に避暑に来ていた、絵の好きな少女(軽井沢の生活を絵に画いて過していた)、矢野綾子だった。この少女の出現によって、突然、ちやうど私の頭上にある、その周囲だけでもうすつかり薄暗くなつてゐる大きな椏の、ほとんど水平に伸びた枝の一つに、ばたばたとびつくりするやうな羽音をさせながら、一羽の



山鳩が飛んできて止まった。さうしてそんなところに私のゐることに向うでも愕いたやうに、再びすぐその枝から、薄暗いために一層大きく見えながら、それは飛び去つて行つた。あたかも私自身の思惟そのものであるかのごとく重々しく羽搏きながら、そしてその翼を無気味に青く光らせながら……。

(美しい村』或は「小遁走曲」)

という『美しい村』の前章までの雰囲気から、前出の「美しい村『夏』」へと明らかに変化していく。いわばそれは少女のもつ明るい生命へと転じていくのである。

こうして堀辰雄は自分と同様、結核に冒された病身の少女矢野綾子に、強く魅きつけられ、二人の愛はしだいにはぐくまれていく。そして翌年、堀辰雄は矢野綾子と婚約するのである。

さらに翌年昭和十年七月、婚約者の病状憂慮の状態にあり、自分の健康も思わしくないため、婚約者矢野綾子に付添つて富士見高原療養所へ入院する。療養所での生活を『風立ちぬ』から考へてみると、「普通の人々がもう行き止まりだと信じてゐるところから始まつてゐるやうな」生活であり、

さういふ時間から抜け出したやうな日々にあつては、私達の日常生活のどんな些細なもので、その一つ一つがいままでとは全然異つた魅力を持ち出すのだ。

堀辰雄は愛する矢野綾子(生)にこの療養所で二番目の重症患者であつた)とともに、僅かに残されていた生を懸命に生きようとし、綾子の「私達、これから本当に生きられるだけ生きませうね……」という切実な生への願望が、今までの物事に対する視点を一変させ

る。すべてのものが絶えず、生と死を意識しながら見られる。そして、「自然なんぞが本当に美しいと思へるのは死んで行かうとする者の眼にだけだ」という一つの觀念によつて、自然が実に美しく存在し、それがすべてのもの(人間も含む)と調和しあつているのである。そのなかで、二人はお互いにお互いの魂を通して、一体となつて自然を見るのである。そのような生活は単一ではあつたが、我々の人生なんぞといふものは要素的には実はこれだけなのである。

とはつきり言いまることができると、運命と戦い、「生」を生きたものであつた。

一方、堀辰雄は、生と死との狭間にある、むしろ死に近づきつつある婚約者矢野綾子との、生と死の間における微妙な位置の差から、時折、ふつと彼女の「生」が自分から離れてゆくことに、言ひしれぬ不安を感じていたのであるまいか。

それがいつ死の床になるかも知れぬやうなベッドで、かうして病人と共に愉しむやうにして味はつてゐる生の快楽——それこそ私達を、この上なく幸福にさせてくれるものだと私達が信じてゐるもの、——それは果して私達を本當に満足させたせるものだらうか？ 私達がいま私達の幸福だと思つてゐるものは、私達がそれを信じてゐるよりは、もつと東の間のもの、もつと気まぐれに近いやうなものではないだらうか？……

(『風立ちぬ』)

こうして堀辰雄は二人の生活「共に愉しむやうにして味はつてゐる生の快楽」のあり方をも、疑問に思いつつ、絶えず生と死への問

をし続けるのである。「風立ちぬ、いざ生きまやも」と叫びながら。だが、入院して六か月後の十二月六日、婚約者矢野綾子は世を去った。綾子を失った悲しみ——彼女の死は母の死や「師芥川龍之介の死」のような激甚な衝撃を与えたというよりも、それら二人の死の基礎の上にあつて、よりいっそう深められる悲しみであつたであらう。

矢野綾子の出現が、堀辰雄に明るい太陽の光をもたらし、「二人の人間がその余りにも短い一生の間をどれだけお互に幸福にさせ合へるか？」という言葉とともに、常に生と死を意識し、見つめながら、なおも生きんとする、精神の極度にも達する緊張、その緊張をみなぎらせてただけに、彼女の死は堀辰雄の心の中に大きな空洞を作り、時がたつにつれて、切ないほどに切切とした深い悲しみが、彼を襲ってくる。

堀辰雄が婚約者矢野綾子の死後に書いた、『風立ちぬ』、その最終章『死のかげの谷』には、矢野綾子への鎮魂曲として、「死を生と断絶したのではなく、生の延長線上にあつて、しかも実在の世界を指向するものと考える」<sup>(注)</sup>リルケの『鎮魂歌』が全体に流れている。

「おい、来て御覧、雫子が来てゐるぞ」

私は恰もお前が小屋の中に居てもするかのやうに想像して、声を低めてさう一人ごちながら、ちつと息をつめてその雫子を見守つてゐた。お前がうつつかり足音でも立てはしまいかと、それまで気づかひながら……

その途端、どこかの小屋で、屋根の雪がどおつと谷ぢゆうに

響きわたるやうな音を立てながら雪崩れ落ちた。私は思はずどきりとしながら、まるで自分の足もとのやうに二羽の雫子が飛び立つてゆくのを呆氣にとられて見てゐた。そのとき殆ど同時に、私は自分のすぐ傍に立つたまま、お前がさういふ時の癖で、何も言はずに、ただ大きく目を睜<sup>みは</sup>りながら私をちつと見つめてゐるのを、苦しいほどまざまざと感じた。

(風立ちぬ『死のかげの谷』)

ここには、死んだ矢野綾子と、なお共に生きていこうとする堀辰雄の、死んだ人への配慮深い愛情にあふれたものが感じられると同時に、それ以上に深く悲痛な嘆きにも似た、死者への悲しみがこめられている。そして静寂で重々しい霧囲気の中で、死者を弔い、魂を鎮める鎮魂曲が静かに奏でられる。こうして、堀辰雄は自らを孤独の中に置いて死を見つめていったのではないだろうか。

このように、堀辰雄は矢野綾子の死を契機に、生と死の意識、人間の悲しみというものをいっそう深めてゆくのである。それとともに、リルケをリルケとして、しっかりと自分のものにしてゆくのである。

以上、堀辰雄と死との出会いについて、三人の死を通してそれぞれ述べてきたが、最後にこの三人の死との出会いが、堀辰雄の人生や文学において、どのようなものとなつていったかを考察してみよう。

堀辰雄は、彼の人生や文学において、大きな礎になっていると思われる「母の死」との出会いによって、彼の内面の一部分が崩壊され、初めて「生の意識」が芽ばえ、次に、「師芥川龍之介の死」に

よって、「生の意識」をはっきりと自覚し、師芥川と反対に生きることを、自分の生涯の課題（文学においても）となし、さらに「婚約者矢野綾子の死」によって、「生と死の意識」や人間の悲しみというものに對する考えがぐっと深まっていき、彼の人生や文学の上に深みのできたのではないだろうか。そして死との出会いのたびに、その死者への鎮魂曲とも言える作品を書き、書くことによって、その衝撃や悲しみをのりこえ、彼の内面にある強固なものがいっそう強められてゆき、それと同時に、文学者としても成長していったと思われる。このように、堀辰雄において死との出会いは、常に彼の人生や文学の上に大きな転機をもたらしてあり、それによって彼の人生や文学は、大きく変化していくのである。また、その死との出会いによって、彼の生涯の宿痾となった病氣、肺結核が生まれ、それが高じていったのである。

それでは、堀辰雄はその病氣をどのように考え、受けとめていたであろう。それを次に述べてみよう。

注1 引用はすべて『風立ちぬ』に拠る。

2 『風立ちぬ』のヒロインは節子であるが、ここではそのモデルとなった矢野綾子に置きかえた。

3 神品芳夫「堀辰雄とリルケ」（昭和52・9『国文学』特集堀辰雄ロマネスクの運命）

## 第二章 堀辰雄と病氣

堀辰雄と病氣について述べる前に、彼の初期の詩を一つあげてみよう。

硝子の破れてゐる窓

僕の蝕齒よ

夜になるとお前のなかに

洋燈がともり

ちつと聞いてゐると

皿やナイフの音がしてくる

この詩について立原道造はこう述べている。「彼は自分の生理を一枚の風景画としてとりあつかつてゐる」と。なるほど、明らかに虫歯が一つの風景となつてゐる。堀辰雄のこういう自己を冷静に見つめ、距離をおいて詩人の眼で自分の体をとらえる眼、その眼で、次に掲げる『病』の詩（彼の病氣に對する考え方、見方が最もよく表われていると思われる）では、彼自身の病氣をもとらえている。

僕の骨にとまつてゐる

小鳥よ 肺結核よ

おまへが嘴で突つくから

僕の痰には血がまじる

おまえが羽ばたくと

僕は咳をする

おまへを眠らせるために

僕は吸入器をかけよう

★

苦痛をごまかすために

僕は死にからかふ

犬にからかふやうに

死は僕に噛みついて

彼の頭文字を入墨しようとして

歯を僕の前にむき出す

この『病』の詩は、堀辰雄が「師芥川龍之介の死」の衝撃から、死に瀕するような肺炎にかかったときに作られたものである。が、それにもかかわらず、病氣という概念や生々しい苦痛というものが感じられない。それとは反対に、まるで小鳥や犬とたわむれているような、リズムカルで、洒落た詩となっている。そして、肺結核が小鳥に、死が犬に、というふうな置きかえられ、病氣の苦痛や死の深刻な影が完全に転化されていると思われる。また、彼は三好達治宛の書簡（昭和二十八年四月二十九日）の中で、「僕はあれからずつと一週間おきぐらゐに『薔薇の花ほど』小さな啞血をつづけてゐました」と書いている。そこには啞血を啞血としてとらえない彼の詩人の眼とともに、「薔薇の花ほど」という言葉に堀辰雄らしい思いやり（相手に対して、自分の体に対して）が感じられるようである。このように堀辰雄は、病氣に対して、一見病氣とたわむれ、それを楽しんでいるような態度で接し、病氣を自分の一部分としてはつきりと認識し、よき伴侶のように自分のものにしているのである。

しかし、結核に冒され、療養所に入院した立原道造が「僕も堀さんのように死と遊んでいたんだけど、とても苦しくて……」と悲痛な言葉をもらしたように、とりわけ、この時代結核といえ、現代のように治癒可能な病氣ではなく、この病氣の宣告を受けることは、死の宣告を受けることでもあったのである。そして、当時、結核に冒され、若くして死んでいった文学者は数多く、すばらしい文学も多く生まれているが、堀辰雄のように、「僕は病氣のおかげで得をして来たんだ」とはつきりいえるように、病氣を自分のものにした人はいったい何人いただろうか。そして、そういう彼の態度はいったいどこから生まれてきたのだろうか。

多恵子夫人は追憶記『晩年の辰雄』の中で次のように述べておられる。

辰雄は自分の置かれた世界を最上のものとし、与えられたものをそのままに受け入れてゆくということを自分の身上としていたようです。「僕は病氣のおかげで得をして来たのだ」などと言えるのも、そうした生活態度から出てくるのではないでしょう。幼年時代にしても、「風立ちぬ」となった富士見のサナトリウムの生活にしても、結婚生活にしても、そう思わずにはいられません。

この身上は、『幼年時代』における無花果の木のように、堀辰雄の人生や文学の根底にずっと流れており、それが彼の死との出会いにおいても、病氣に対する姿勢においても大きな影響を及ぼしているのではないだろうか。さらに「自分のおかれた環境に満足して、其処から喜びを見出して行かなければいけない」という言葉、それ

らは彼の文学や生き方の上に見られる強靱なエネルギーにも似た、強固なものを生み出す原動力ともなっているのではないだろうか。

注1 立原道造「風立ちぬ」(文芸読本『堀辰雄』)

### 第三章 堀辰雄における生と死とエネルギー

堀辰雄の文学は一見、時代の流れというものから隔絶しているように見えるが、堀辰雄の生涯は、日露戦争の開戦にはじまり、第一次世界大戦、関東大震災、金融恐慌、満州事変、マルクス主義運動の展開、二・二六事件、日中戦争、太平洋戦争、日本の敗戦、戦後、そして朝鮮戦争の休戦協定の成立で終わるといふ、まさに日本の激動の時代の最中を生きぬいた生涯であった。そして堀辰雄の文学は明らかに、その時代の流れを生きぬいた堀辰雄自身の手によって書かれたものである。そこでまず、堀辰雄が時代の流れの中で、その時代の流れに左右されず、いかにして自分の文学を真の芸術たらしめようとしたか、また自己の文学を確立していったかをさぐってみよう。

大正の末期から昭和の初期にかけては、同人雑誌がさかんに創刊されるようになった時期である。そのなかで、堀辰雄はいくつかの同人雑誌の同人となり、やがて大正十五年、中野重治、窪川鶴次郎、平木二六らと同人雑誌『驢馬』を創刊する。が、昭和二年堀辰雄は「師芥川龍之介の死」によって、非常な衝撃をうけ、やがて死に瀕するような肺炎にかかる。一方、激動の時代の中でプロレタリア文

学は最盛期をむかえ、『驢馬』の同人たちは次々と、プロレタリア文学運動に参加していき、堀辰雄が唯一人取残されていくのである。しかし、彼はそのような魂の孤独と病気の苦しみの中で、苦痛にあえぎながらも、時代の流れに押流されず、あくまでも自分の立場を守り通すのである。

『驢馬』の同人たちはみんな思想的に変つてプロレタリアの詩人になつて行つた。その中でもつて、僕だけが一人とり残された。僕はさういふ自分をひどく悲しみはしたが、それでもとうとう自分の立場を守り通した。

(二人の友——一、中野重治)

ここに堀辰雄が自分や自分の文学のあり方をいかによく見極めていたか、そしてそれをいかに強固に守つていったか、彼の文学に対する強い信念と強靱なエネルギーが感じられるのである。そしてそこから堀辰雄は、時代の流れに押流されないために、どんな時代の流れの中でも、常に不変の力を持つもの、「生と死と愛」を大きなテーマとして、一から自分独自の世界を築いていこうとするのである。彼はまず、第二章に前出の『病』の詩を書き、肉体や精神の苦痛から脱出をはかろうとする。それから『芥川龍之介論』を書き、『聖家族』を書いていくことによって、「師芥川龍之介の死」をのりこえ、『美しい村』を書くことによって、完全に死の暗い影から脱出するのである。そして、矢野綾子の出現とその死との出会いの中で、堀辰雄は急速にリルケに接近していき、当時あまり知られていなかったリルケを、丹念な努力を重ねることによって、又死との出会いを通して、自己の内面で深くリルケの真髄をつかみとり、ますます人生を深めていったのである。堀辰雄においてリルケとは、

彼の人生の書ともいうべきものであったのではないだろうか。

このようにして「生と死と愛」のテーマは『風立ちぬ』において一つの完成を見ると同時に、堀辰雄の文学は激動の時代の流れの中にしっかりと確立したのである。この『病』から『風立ちぬ』に到るまでの様々な苦痛や葛藤を克服した、彼の内面における強靱なエネルギーともいべきものをこれから探ってみよう。

一見、めぐまれているように見えながら、肺結核という病気をもち、常に生と死との間に不均衡に位置していた堀辰雄は、その病気を親しい伴侶とし、親しい者たちの死との出会いや、死につながる病気を通して、生と死を自分の文学のテーマとしていたのであるが、そこにはいつも絶え間なく続く不変の努力があったのである。

その努力によって、外国文学を吸収し、それを自分の文学を形成していくための養分として、完全に自分のものにしていった。そして又自分を自分の力で自分なりに成熟させ、高めていったのである。ところで、その不変の努力の根源ともなり、彼の生きるエネルギーとも、また彼を芸術家としてあらしめているものとも思われるものは、マイナスからプラスへの転化のエネルギー——すなわち、逆境

を最良のものへと変化させていく強靱な意志の力——ではあるまいか。そのエネルギーが、死へとつながる病気を、親しい伴侶となし、現実世界とは別のもう一つの世界を、堀辰雄の内面に形成させ、堀辰雄が二つの世界に生きることを可能にしたのである。そしてそのエネルギーが最大限に働いたのは「生」、まさに生きんとすることであり、堀辰雄は決して、死にはむかわらず生にむかって、生きて、生きて、生きぬいたのである。「人はまだ堀は生きていて、

よく持つものだ」と寄れば言い合ったほど、あるだけのもので生きぬいた男であった」と室生犀星が語ったように。

このマイナスからプラスへの転化のエネルギーは、いったいどこから生まれたのであろうか。それは、第一章、第一節における『幼年時代』の無花果の木のように生まれながらの素質と、「自分の置かれた世界を最上のものとし、与えられたものをそのまま受け入れてゆく」<sup>(注2)</sup>という幼い頃からの身上、そして、「自分のおかれた環境に満足して、其処から喜びを見出して行かなければいけない」という多恵子夫人に教えた言葉、これらの上に、さらに親しい者たちの死との出会いを通して、堀辰雄の内面にしだいに増強されていったのではあるまいか。この強靱な意志の力ともいえる、マイナスからプラスへの転化のエネルギーが堀辰雄の内面にしっかりと息づいているからこそ、「常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである」という『風立ちぬ』は、戦時中、死を目前にした多くの予備学生によって愛読され、戦後も消えることなく、色あせることもなく、美しく純粹な魅力を持って、今なお多くの人々によって愛読されているのであろう。

堀辰雄は、まさに真実「生」を生きぬいた本当の詩人であったのである。

注1 室生犀星「わが愛する詩人の伝記・堀辰雄」(文芸読本『堀辰雄』)

2 堀多恵子『晩年の辰雄』(第二章前出)

3 「注2」に同じ。

おわりに

堀辰雄の清新で、美しく、香り高い作品の中から立ちのぼってくるようなあの雰囲気は、自然を愛し、すべての人々を愛し、またその双方からも愛されていた高雅な人間性と、逆境をも最良のものに、マイナスをもプラスに変えてしまう強靱な意志の力によって生み出されたのではないだろうか。人間の悲しみというものを本当によく知り、自分というものをよく知り、自分を大切にしながらも、決して自分を甘やかさず、絶えず自分を高めていった人、堀辰雄、彼の生き方やその生涯をさぐりつつ、彼の強靱なエネルギーとも言うべき意志の力を追求したことに、私は今、一つの人生との出会いを感じている。私は堀辰雄の生涯から、「生きる」ということを学んだのである。どんな逆境にも負けないで、むしろそれを最良のものとして生きていくこと、それを私のこれからの人生の課題として、自分のできうる限りのものをもって、常に自己の向上をめざしつつ、思いやりの心を忘れずに、強く生きていきたいと思う。

参考文献

- 『堀辰雄全集』 筑摩書房  
 『葉鶏頭——辰雄のいる随筆』 堀多恵子 麦書房  
 『堀辰雄——妻への手紙』 堀多恵子編 新潮社  
 『堀辰雄——魂の旅——』 田中清光 文京書房

- 『堀辰雄——現代のエスプリ』 佐々木基一 至文堂  
 『堀辰雄』 日本文学研究資料刊行会編 有精堂  
 『堀辰雄』 小川和佑 三交社  
 『片蔭の道』 堀多恵子 青娥書房  
 『文芸読本 堀辰雄』 河出書房新社  
 『評伝 堀辰雄』 小川和佑 六興出版  
 『国文学 堀辰雄・ロマネスクの運命』 昭52・7 学燈社  
 『太陽 堀辰雄と信濃路』 昭48・7 平凡社  
 『堀辰雄——現代日本文学アルバム第12巻』 昭49・8 学習研究社

〔評〕

信州旅行で追分や軽井沢を歩き、追分ではその旧宅を訪れて親しく体験したことが、堀辰雄への関心を深め、作品理解に大いに役立ったばかりでなく、卒業論文の対象に彼を選ぶきっかけとなった、その心理的推移がよく分かる。先ず、「三人の死との出会い」の、堀辰雄の人生と文学への影響が、過不足なく解き明かされている。その「三人の死との出会い」と深いかかわりのある堀自身の病氣と死との関係へ、究明の手がさらに伸ばされてゆく。「マイナスからプラスへの転化のエネルギー」は、どこから生まれたか。その根元を解く所で筆をおさめたのも、この論文の性格からいって、当然のことであったといわねばならぬ。通読した印象では、やはり芥川龍之介と堀辰雄との関係の追究が圧巻であると思う。好論文である。

(清水 文雄)